



地球市民

オホーツク国際理解教育研究会

2018/11/ No.2

いつでも・どこでも・だれでもできる国際理解教育を目指して

深化する 国際理解教育

伊藤 聡 研究部長 全道提言 大成功に終わる ～オホーツクスタイルの実践を通じて～

11月15日からの全道国際理解教育研究会後志大会で伊藤先生が第2分科会で提言発表を行い、全道各地から注目を集めました。

「世界と関わる・世界を知ること」だけが、国際理解教育なのではなく、様々な他者と関わろうという態度を育てることが、「行動化」の第一歩であり、現代の子ども達には必要な姿勢である。

研究成果 ①国際理解教育を様々な教科で実践できるようになった。

②会員外にも本研究会の研究内容を示しやすくなった。

③自分の考えを自由に持てる発問によって、子どもの「思考のハードル」を下げることができた。

課題 ①「かかわる」場面で、話し合いを活性化させる手立てが必要。

②対話活動の範例集約や実践交流が必要。

第31回オホーツク国際理解教育研究会北見大会のご案内

みなさんの参加をお待ちしています。ともに学び合いましょ！

期 日 平成30年12月14日(金)

大会主題 多様な世界に関わり続ける行動力を身に付けた児童・生徒の育成
～世界を意識し、他者と意欲的にかかわろうとする子供をめざして～

公開授業 9:30 5年生 外国語科「What do you have on Monday?」
授業者 忍 関 愛 教諭 会場：北見市立三輪小学校)

小学校外国語科での新教材「We can 1」を使った実践です。
海外の小学校の時間割について学習しグループで発表します。

11:15 6年生 家庭科「くふうしよう おいしい食事」

授業者 林 優希 教諭 会場：北見市立小泉小学校
世界遺産に登録された和食をテーマに、対話活動を通して栄養バランスについて考える授業です。

世界を語る会 終了

今年度、日本人学校から帰国した会員から3年間の勤務を終えて報告がありました。派遣前の手続きや学校での業務、日常生活について、貴重なお話をうかがうことができました。当日は、これから在外教育施設を目指す先生もいて、質疑も充実した時間となりました。ご多用中、お二人の先生には大変お世話になりました。

発表者

インドネシア バンドン日本人学校
北見市立常呂小学校 櫻田 弘道 校長先生

ブラジル リオデジャネイロ日本人学校
網走市立白鳥台小学校 森 奈穂 先生

オホーツク大会に向けて役員会、研究部会が開催されています。



各事業の進捗状況の確認や指導案の検討、年度内の行事の提案など、各係が計画的に業務を推進し、今年度の取組を見通すことができるようになりました。昨年の全道国際理解教育研究会北見大会で得られた成果をさらに発展させるよう、今後とも会員一同取り組んでいきたいと思っております。

3年目を迎えています。



インド ニューデリー日本人学校 大平 裕二 先生

早いものでニューデリー日本人学校への派遣も3年目となりました。今年は、9年生(中学3年生)の担任をしています。最高学年としての責任、日本(世界)各地への進路指導に戸惑いながらも、日本では味合うことのできない現状を楽しんでいます。

現地校訪問

先日、現地の学校を訪問してもらい、授業見学や先生方と懇談する機会がありましたので、その様子をお伝えします。

この学校は Delhi

international school という私立校で、数年前に新設された学校です。とてもきれいな校舎で、学校の玄関はホテルのロビーを思わせるような入口になっていて驚かされました。また、器楽演奏による出迎えや、記念植樹、日本語での歌や伝統的な踊りを披露してくれるなど熱烈的な歓迎を受けました。そして、この日はすべての先生方が、特別に色鮮やかなサリーを着てくれていました。私たち日本人は、黒や紺のスーツに白いシャツがほとんどでしたので、その色の違いが印象的でした。

また、気が付けば女性ばかりがいるなと思って聞いてみると、インドで教師といえば、女性の職業になっているようです。



授業見学

さて、今回の授業見学の日は土曜日でしたので、通常の授業ではなく MATHS、SCIENCE、DANCE、MUSIC などの科目を自分で選択をするクラブという授業を行っていました。科目の中には、サンスクリット語やフランス語のクラブもありヒンディー語や英語以外に、第3第4の言語を学ぶ生徒もいるようです。どのクラブも6名程度の少人数でテーマを与えて、それについて考えさせ、発表させる形式の授業が多く見られました。その中でも特に気になった授業は、

STEM (Science, Technology, Engineering and Mathematics) というクラブです。そのクラブでは、「安全なヘルメットや大気汚染のためにマスクを開発する」というテーマで授業を行っていました。



6年生のクラスですので、まだまだ本格的な開発というよりは、図工に近い活動でしたが、身近な材料を使いながらヘルメットやマスクを作り、実験をしていくようです。児童に質問をしてもしっかりとした答えが返ってきました。優秀なエンジニアを育てたいというインドの教育の一端が見られた感じがしました。また、各教室には、電子黒板とプロジェクターなどの ICT 機器が設置されており、授業において児童生徒の興味関心を高めるために用いられていました。動画などのソフトも共通のものを使用しており、どの学校においても、同じ質の授業ができるようになっていました。



インドの教育

インドの教育といえば、20×20 などのかけ算が有名ですが、こちらの学校では、10×10 までのかけ算を学習していました。気になって調べてみると、インドにおけるかけ算の学習は、それぞれの学校や個人に任せてあり、一部の学校や一部の子どもたちが 20×20 までのかけ算を学習しているようです。



懇談では、特別支援教育について質問ができました。インドにおいても、特別な支援を要する児童生徒がいて、それらの児童生徒を学校も受け入れています。支援については、1時間の学習内容を細かく砕いたり、ゲーム性のある学習を取り入れたりしながら、スモールステップで一つ一つ成長させていきます。この方法は日本と同じでしたが、児童生徒一人一人に支援員を配置していることには驚きました。教員免許をもったコーディネーターがそれらの支援員の活動をサポートし、支援員が授業中の立ち歩きや不規則発言については、指導を行うそうです。

